

| | |
|--------|-----|
| 都道府県番号 | 34 |
| 都道府県名 | 広島県 |

・学校の概要

()

| 三原市立小坂小学校 | | | | | | | | | |
|-----------|----|----|----|----|----|----|------|-----|-----|
| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 6 | |
| 児童数 | 13 | 19 | 16 | 24 | 12 | 19 | 0 | 103 | 10 |

・実践研究の概要

1 研究主題

「自ら考え、豊かに表現する子どもを育てる授業の創造」
副題 - 評価を生かした指導を通して -

2 テーマ設定の趣旨

本校で昨年度まで積み上げてきた「主体的に学び、豊かに自己表現する子ども」に育てるための授業のあり方の研究実践を引き継ぎ、本校児童の実態と新学習指導要領解説の改訂の基本方針を照らし合わせて、本年度、算数科を中心に確かな学力向上のための研究実践を行うこととし、教職員の持ち味や得意分野を生かし教科指導の充実を図りながら研究を進めていくこととした。

この主題に迫るために本校では、学力実態調査(新-CRT-)によって実態をとらえ、個の実態に応じてどのように迫っていけば、学力は向上するのかという方向性を見いだしていくことにした。

・実践研究の内容

() 研究体制の工夫

研究を具体的に進めるために、二つのグループ(評価グループ・指導法グループ)に分かれ、研究を進めていった。

評価グループ

新しい単元に入る前に、診断的テストを行う。

ア その結果を元に児童に治療的な指導を行う。

イ 診断的テストを作るために、各単元、領域の関連を調べる。

ウ どんなテストを作ればよいか考える。

授業の終わり、または、単元の終わりに、自己評価(相互評価を加味した)の作成をする。

評価規準作り、どういう力を付ければよいかということを明確にする。

単元、小単元、毎時間ごとの評価規準を作り、毎時間評価をし、それをもとに児童の実態を明らかにする。

朝学の輝きタイムの時間に習熟度別プリントの取り組みをする。

学習過程での評価(形成的評価)をどのようにしているか。児童への声かけをどうしているか交流する。

指導法グループ

授業の実態把握と改善点...ア ノートの取り方、イ 学習係の活躍の場の設定、ウ 学習課題作り、エ かかわりの

ある発言

ア TT指導のあり方、少人数授業のコースモデル

イ 授業の流れについて...「つかむ 深める まとめる 振り返る」

ウ 学習課題について各単位時間における課題を設定する。 →

・子どもの知的好奇心をそそるもの
・半知半解のもの
・新奇なもの
・子どもの生活と関連の深いもの

学級集団の編成の形態

| | | |
|------|----------|----------------------------------|
| 分割学習 | 表現方法別 ⇨ | 課題解決の表現方法が違うコース分け |
| | 興味・関心別 ⇨ | 自分の興味や関心に沿って選別した学習課題や学習対象別のコース分け |
| | 習熟度別 ⇨ | 学習を習熟する過程で既習内容の理解や習熟の程度に応じたコース分け |
| | 単 純 ⇨ | 人数を単純等質に2分の1または3分の1にするコース分け |

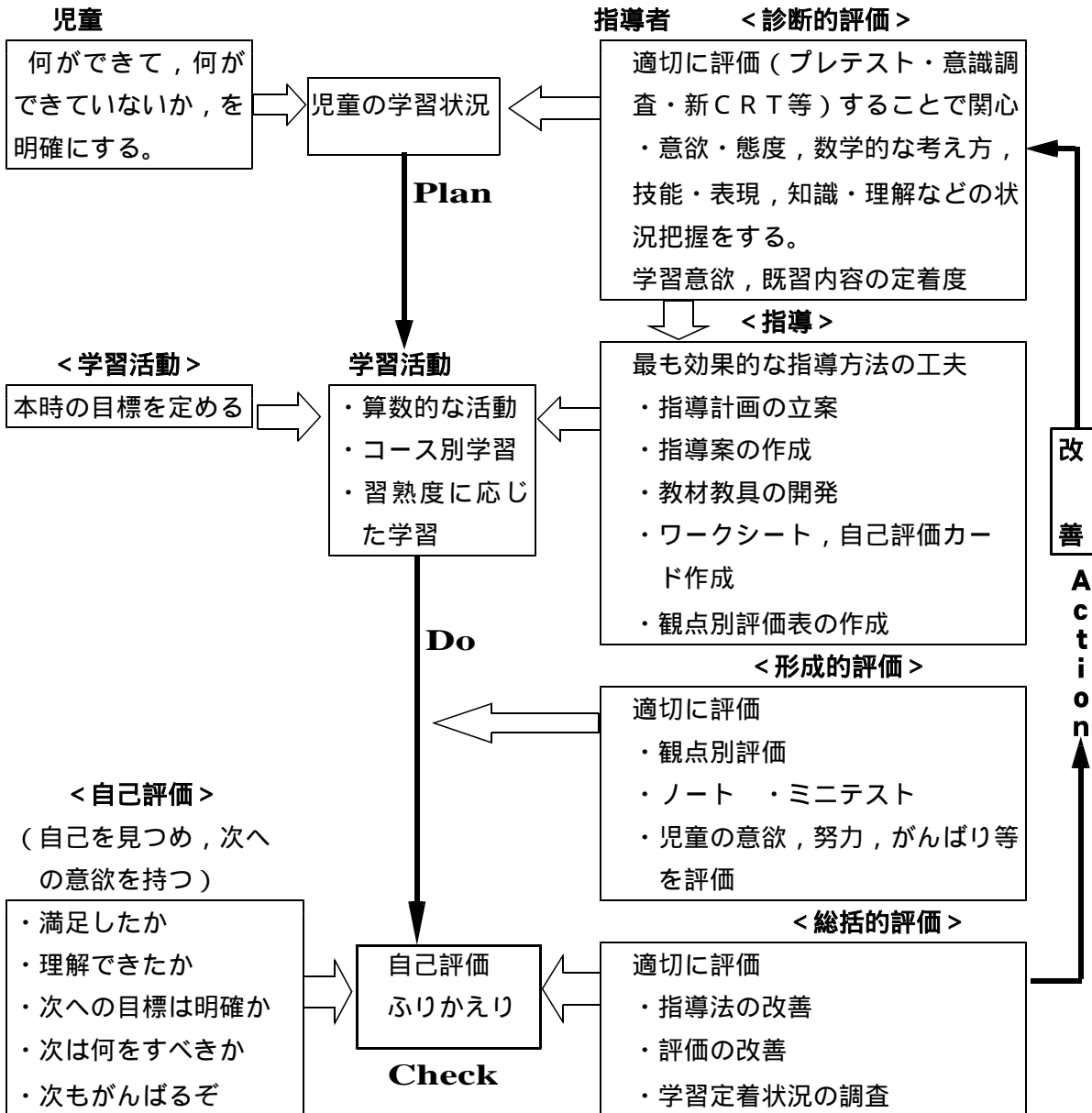
指導法グループと評価グループの交流と確認

- ア **診断テスト**により，単元に入る前の基礎学力を調べ，必要な基礎学力がない場合，事前に補っておく。
- イ 個を把握した上での単元学習をTTにより一斉に行う。または，**習熟度別**に学習を行う。
- ウ 単元学習終了後，**セレクトプリント**により，個に応じて習熟を図る。
- エ 授業後，あるいは小単元終了後，**自己評価カード**により，自己評価を行う。

() 実践研究の内容

評価と指導法 構想図

授業での学習活動だけでなく，学校生活全体を網羅し，指導と評価の一体化という面から，構想図としてまとめた。



実践事例6年生の実践から

ア プレテスト

本学級は、算数への関心・意欲は低く、二学期末の算数科に対する意識調査によると、「とても好き」と答えた児童は、3名にとどまっている。「みんなの前で発表することが好きでない」児童は10名と過半数を占めており、表現することに抵抗感を持っていることがわかる。ただし、「算数を学習する必要性」については、10名が「とても必要である」と感じており、児童の興味・関心をそそる教材、満足感のもてる学習活動を仕組んでいかなければならない。

プレテストの結果は、以下の通り

| 項目 | 例題 | 正解率 |
|-----------|--|------|
| 小数と百分率の換算 | $0.3=()\%$, $1.2=()\%$, $50.2\%=()$, $100\%=()$ | 100% |
| 割合を求める問題 | 15 kgは、60 kgの()倍 | 68% |
| 比較量を求める問題 | 400 m ² の40%は、()m ² | 89% |
| | 120人のうち55%は、()人 | 78% |
| 基準量を求める問題 | 35 kmは、()kmの7% | 73% |
| | 21 kgは、()kgの0.3倍 | 63% |
| 売値を求める問題 | 定価1400円の人形を20%引きの値段 | 78% |
| | 問題の説明(自由記述) | 52% |
| 関心・意欲 | 日常生活の中で、割合が使われている場面(自由記述) | 89% |

それぞれの項目毎に、補充学習をした。

イ 課題解決場面での個に応じた少人数学習

課題解決の本時では、個に応じた学習とするために、表現方法別にグループ分けをし、それぞれのグループ毎に学習課題の解決を図っていった。

・グラフで考えるグループ ・式で考えるグループ ・絵図に描いて考えるグループ ・ぼうを使って考えるグループ

ウ 学習した内容の定着を図るための個に応じた習熟度別学習

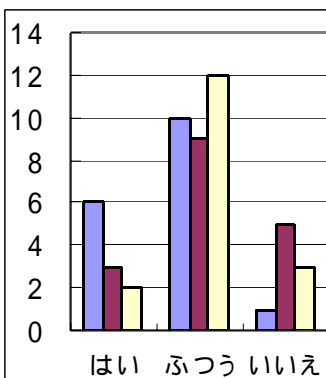
学習内容を十分理解している児童は、自分で考えた問題を作り、友だち同士で問題を出し合って学習内容の定着を図る。

十分定着していない児童については、基本的な問題を順に解いて定着を図る。

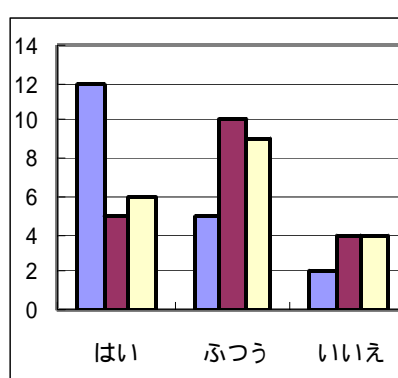
エ 自己評価カード

1単位時間の始めに、自分のめあてを書き、学習の最後に自己評価を行っていった。集計の結果は次の通り。

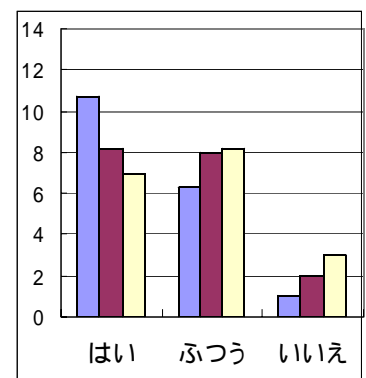
9月 「道のりを求める」



10月 「比例とはどんなもの」



2月 「比とその利用」



グラフの見方...いちばん左の棒は「わかりましたか」の設問、真ん中のぼうは「楽しかったですか」という設問、右は「進んで考えましたか」という設問に対する回答。例えば、9月のグラフで言えば、「わかりましたか」に対する回答は、「はい」が6人、「ふつう」が10人、「いいえ」が1人となっている。

実践の分析

9月から2月までのグラフをみると、単元によってばらつきはあるものの徐々に上向いている。

質問ごとに分析すると、「学習がわかりましたか」という質問に対して、理解できたという回答は早い段階からよく伸びている。続いて、楽しかったという回答と進んで考えたという回答が伸びてきていることがわかる。これは、学習意欲が高まっていることを表しているのとらえる。

また、一言感想をみても、同じような傾向が表れている。

例えば、「比例とはどんなもの」での感想では、

・比例の計算のやり方がいろいろあることを知って、「なるほど」と思った。 ・最初はあんまり分からなかったけど、後から分かるようになった。比例は意味が分かるとすぐわかったと思った。 ・比例はわかりやすくよくわかった。

など、理解を示す感想が多くあったのが、取り組みが進むにつれて、「比とその利用」では、

・さんの意見は正しいのか知りたい。 ・今日は進んで考えたなあ。 ・君の意見は興味深い。
・こんなやり方もあるんだなあ、今度はちがうやり方でやりたい。

など、学習に対する意欲や興味を示す感想を書くようになってきている。また、単元の学習後、市販テストの結果は、平均で90点を超えており、これまでの最高の通過率であった。

(4年生の実践例) 4年生の分数の取り組みでは、習熟度別の授業の中で、いつもは、算数科にあまり意欲的でない児童から、「算数がこんなに楽しいとはおもわなかった。」という感想を大きな声で言う一幕もあった。技能・表現を習熟あるいは、定着させるような学習では、同じように進む一斉授業よりも、自分の速さに合ったスタイルで学習する方が適していて、大切にしなければならないということがわかった。また、TTにより、先生が一人ひとりの子どもたちに深くかわかることの大切さもよくわかった。

() 成果と課題

成果

- ・これまで、一人一人の学力をきちんと把握することが必ずしもできていたとは言えなかったが、新-CRT-の学力実態調査、意識調査、自己評価カードなどによって、児童の学力の実態や傾向を明らかにし、授業に生かすことができた。
- ・児童は、自己評価によって、自己を振り返り、何がわかっていて次に何を学習すればよいのかということが次第に明らかとなり、そのことが、学習に対する関心・意欲につながってきている。
- ・習熟の程度に応じた学習の進め方を模索し、十分ではないが、個に応じた学習のいくつかのパターンで学習することで、関心・意欲を高めることができた。
- ・習熟度別学習を行った後、いつもは、算数に消極的な児童が、「算数がこんなに楽しいとは思わなかった。」と言って、チャイムがなってももっとやりたいという状態が見られた。これは、習熟度別学習による成果であると考えられる。
- ・問題場面に沿った教具を用意し、算数的活動を仕組むことで、普段、算数には消極的な児童の関心・意欲を高めることができた。

課題

- ・個に応じた学習形態には、等質分割・興味・関心別・習熟度別などさまざまな形態が考えられることがわかってきたが、今後、どの学年のどの単元ではどのような学習形態がよりよいのか、また、習熟によるグループ分けはどのような時に有効なのかを、体系的に分類・整理していく必要がある。
- ・児童の関心・意欲を高めるための評価のあり方、特に、授業の中で行う形成的評価を交流し、意欲向上のための指導方法を工夫し、確かな学力を上げていく必要がある。(指導と評価の一体化)
- ・検証授業の分析の視点に曖昧な点があり、その都度、視点が変わっていたところがあるのでどの授業も統一した視点で分析するために視点を明確にしておく。

() 成果の普及方策

- | | | |
|----------|------|---|
| ・教育研究会開催 | 日 時 | 平成15年2月5日(水) 13:15~16:15 |
| | 場 所 | 三原市立小坂小学校 |
| | 研究主題 | 自ら考え、豊かに表現する子どもを育てる授業の創造 - 評価を生かした指導を通して - |
| | 対 象 | 広島県尾三教育事務所管内 |

- ・参加していない市内の小・中学校へ研究会要項並びに学習指導案配布
- ・HPで研究会の様子・成果・課題の報告(予定)